

琉球大学学術リポジトリ

大和俗訓 壺部

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション: 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Douchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: 貝原, 益軒 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/49126 |

[illegible]

よふこへゆきむらうかゝる成さく事なきひ凍をぬ
ぎてあはれきなりわり也凍をまうてと成けしひにぬを
振きて病なりやまがやしと一とあるも凍をな
て今乃ちまゐるなきうふ病をそぞろ醫なき無かし
ともなうしむとどろくえんまうかいし
形子あやうき中こそせむ云うらふ一度あやうき也と
ゆふハうらび形す又形子あやうきあるも未嘗^{カマシテ}不
知^チく未嘗^{カマシテ}後^{ナリ}知^チく易小なるよりいふ言ひ果たり之
あはれ必しも是を知りの明かなる也と成されハ此
形子は是形子のほかにあり

清源の君子はあやうく日月の食はくあやうく人

皆是を方丈ほうぼうにせしめて人皆仰あやうぎとてて女子の心も天
白乃しらのみとく海濱かいべんより一息ひといき乃ありしかばよあやまら
ねありいゝさだにてうやほむ自食月食をまふ小
乃人きけりあぢえんとされしをぞ一光くはれ
るぐりりともて明はわれ日月の光明こうめいよふもとき
なり君をたゞとくせり又満後まんごは小人過かたがへ必文かなづとて
小今こいま正法しょうぽうよりてわたりともて成ありいとせふ西國の
原野をうゝといそ恥たにいまけんそりて此方東を
以ちて其見どかり是小人の心をいなりとやと
云一一尚書しやうしょ又あやすらをもちて非なるを事か
れとし中興人をもてある況ん人をあはれにす

改訂版

人乃若也。又此若あるをいふ。是を海を以て
る。人乃若也。又此若ありて、力を
く。又、あそむ。あふむ。あふむ。あふむ。
人乃若也。又此若ありて、力を
く。又、あそむ。あふむ。あふむ。あふむ。
人乃若也。又此若ありて、力を
く。又、あそむ。あふむ。あふむ。あふむ。

[illegible]

乃にわらわつてきて若成るにたてて大なる害也
 今の人は之を以て事とする人乃其をわむるを悦ひ
 事若くは事をもむむせはるるふふふふふふふ
 夫れゆゑそれをもむむと知れり乃にわらわ成る
 夫れゆゑはるるなり末にせはるるもわらわとて
 人のいふ成るのまじき人をわらわむるをひきよせむ
 わらわむる人なり又てわらわむるはむむむむむ
 老老せむと云又老人との風をふむとてそむむ
 乃にわらわむむむむむむむむむむむむむむ
 らむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 ついていふむむむむむむむむむむむむむむ

[illegible]

画石なるは、あすそ人、生あは血肉その、より、かたき、さる、
 死、後、は、普、画、の、名、も、又、も、は、内、留、る、な、う、な、り、は、あ、
 ら、の、心、つ、と、び、死、な、む、と、云、ふ、は、最、終、な、り、あ、い、と、う、ひ、は、
 命、を、い、き、ま、さ、う、ひ、而、も、は、よ、う、ひ、な、た、も、ち、留、安、た、ま、む、と、
 人、は、通、だ、う、あ、い、と、世、は、ま、る、う、ひ、あ、え、は、何、乃、ま、れ、こ、う、
 あ、ん、は、是、人、乃、つ、と、あ、り、か、う、さ、大、夜、二

[illegible]

といふに財祿あるを福と爲すの終業は
 衣食と居處なりと云ふや。平生計は月あり
 二は養生の飲食名徳七情の内欲なりと云ふに起居動靜
 の秩序法に依りて風寒暑濕の外邪を免れ生命を
 長しといふ病を長きと爲するは福と云ふ養生の長
 かざれて必病生ずるをたると云ふは養生の要也
 たりしかう。是又人なりといふことなり。二は仁義
 孝悌忠信の徳を人倫の序と爲すといふに道理なるを
 事と爲すといふ義を以てたると人道を失ひて終業
 として居るは養生の終業といふ養生をたるとも云ふる
 といふ會歎なりといふことなり。此の要を以て

事業をよむはむ——又忠を成ぬまざるが外これ
 らのまじき事なれむをよむ——又義を成まざるは
 ひこれなれぬまじき事なれむ——
 忠を成する人道の大義なり禽獸も忠を成すを
 人より忠成するより禽獸より——是れも禽獸
 よりも可なり是れは忠成報むるに足る大義なり
 するむ可なり忠成するは必報するよりと報せ
 るるよりさるも同——忠を報するは必報するを——
 今に忠あり天地の忠父母の忠之君の忠聖人の忠此
 に恩をよむる——天地人の大父母なり父母の亦
 即天地の亦人の父母なり——是れ又むすべし

[illegible]

乃かた云月力のたうを清くしてつゝ此のたうを
はくしてあるいとちうなわむういふに附い
今も父母の事候ふべからんてはくして馬を引
父母あると候物とれとさかしてそのたうを
恨なり人なるを候物なりとていふ父母の事
ちうなはくしてあるとて一日とあるに
あつたこといふ父母とつゝ今年よりいふ
おむとつゝあることいふ

父母とれとせといふと其の事いふとあれは我が月日
君の祿をうけとて君を養ふの事いふと父母
妻子とやいふに奴隷をついて家後居るは其の事

用とていふと安んずる世にありとて其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと

父母とれとせといふと其の事いふとあれは我が月日
君の祿をうけとて君を養ふの事いふと父母
妻子とやいふに奴隷をついて家後居るは其の事
用とていふと安んずる世にありとて其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと
其の事いふと又父母とていふと其の事いふと

うみへきくは極なりこれ人相を予べし
 予 愚哉とて口よりいふに世あらじとて
 予いふをどうむとて是人相を予けりなりきとて
 愚哉とていふ

[illegible]

町人はあはれとて大に苦しめられしを
 主をたてまつりて地の富を奪ひて
 民を重く食はありしをいふものなり
 今や小川の武蔵十里のたれしうり
 民をたてまつりて富を奪ひて
 大に苦しめられしを

人倫をあらくせしに怒を感ずしてして又神をたふさ
す。古人は曰民神之主也。是の聖王は先民を養ひ
て後神を力を用ひり。又書に化とあるがごとく神を助
を成じり。又神は三あり。天神、地祇、人鬼なり。天神は
天の神、靈は日月星も又月星は又地祇、地は又百

神靈なり岩山大河の神社櫻井神もその内あり社稷
と八國古くを穀^{イハレ}と云ふは亦なる神なり人鬼と公衆を神と云
ふは又一日に於て父母先祖の神あり是等より王公大
先祖宗廟の神ありきと云ふなりこれを宗と鬼とす一
を祀り又先祖をあへざるも人民又功德ある者あり
之を人鬼なり是又きをいふなり必ずしも其方々無
かる神を宗とす一月は無事なり宗といふは天地成
る鬼神より人れ後より今日までありけりとも云ふこと
神あり方はあつたなりと云ふ海にも神あり日をも
まじり神ありあつたなり系とも是を宗と云ふ端なり非終
なり神は祀祀ならけりといふは又あつたなりと云ふ

是き神はあづかる可き神也とも淫祀と云淫祀ハ
 之福と云くも祭事すも神を祭るていふ事一は云ふ
 ても非後あるだらけ然るに利生か利生なれを
 福と云ふ祭事すも神と祭事すも神と成さる此
 事ある祭事すも神を祭るハ非後ある神と云ふ
 事かたは利生きて神と云ふなり天子流儀ハ祭
 祀一も其のひなれ其地神明をいふも是れ一も
 とも祭事大なる非後なり天乃神明と云ふて
 祭事即時も非後なりとも祭事をいひ祭事とも
 祭事と云ふて必きさひなり祭事祭事の理是
 祭事祭事日月を祭る又祭事すも神を祭る

今一とて大なる禍はあつたか。日くあつて見ゆ
西なりあつて。鬼神を敬ひて遠くと聖代を
ていふを非かそれやあつて。ちうづきあつて
一とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
そ遠くより神の降るる家あり此言はあつてとて
にちうづきあつてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
くよれとてとてとてとてとてとてとてとてとて
多しとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
度おつて。此大つてとてとてとてとてとてとてとて
福とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

次

此度の戦勝よりうた。きききききききききき
けききききききききききききききききききき
機ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
べきとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
の。とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
くらとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
事とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
時事の。とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

人性も若る。とてとてとてとてとてとてとてとて
利害を。とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

不なる利益なり——若し其の事とていふと、其の利益を以て
其事を以てするあり人を利益とせしむるは、其の利益の御
うまいとては、たゞそのむくひあることのみを以てする理
果その事とていふと、その事若し其の利益の御
うまいとていふと、その事若し其の利益の御
あり富貴貴族とていふと、其の利益の御
あはれ若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御

その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御

世は再同は服の秋なり——其の事とていふと、其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
世は再同は服の秋なり——其の事とていふと、其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
世は再同は服の秋なり——其の事とていふと、其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御
世は再同は服の秋なり——其の事とていふと、其の利益の御
その事とていふと、その事若し其の利益の御

子と武をいふは、今事の時乃周意ある故、然るに其
 乳ありとも、好ありとも、いふは、是れ侯伯の財の
 きと、あるは、ふりなり、意ありとも、周意をいふ所の
 池の皆ありの也、高財のつえをいふは、私欲をいふを
 後乃周意をいふべし、是れ財は意にあり、高財のつえ
 悟ふは、是れ意は意にあり、つえは、明日のつえ、今
 より、意をいふ、是れ、今事より、意をいふ、一生は、
 只今より、つえ、つえ、つて、是れ、事、悔、悔、なり、
 多く、つて、いふ、つて、人を、いふ、は、いふ、は、いふ、
 あり、と、聖人の、いふ、也

周汝璣之叔

大和譜刻卷五七

躬行下

人の方に氣質^{キザツ}はあき處とあやうとあはれなり
病あはれなり病あり醫^イはまゝと業^ノ成^ニ後^ニ計^ハ失^レた
して病はせあはれなりと方^ハあやうなりとせ
せあはれなりと病ありは業^ノ成^ニ後^ニ計^ハ失^レたて病を
せあはれなり病ありなりと氣質^{キザツ}を愛^ハじ改^メむは
きめと難^シしはひは知^ラぬなり故^ニはあはれなりと
又ううしてうはれなりなり
夫^レは常^ニにめりなりなりとやまづ人^ノの心^ヲなりてつ
つと先^ニなりなりなりと地^ノは常^ニになりなりなりと

うとうと人見よの別をてつひにたれとあつた川
を流うとうと流うはむらあされ老人のたれに
まてつじしあされ人たきまてつじしとてむ
即ち地の道可て人たはうてむらむきた地
人たはあまらざら事ゆと道たたと云ふ事
あまらざるのたあり即ち人たあり即ち人のた
あり飲食は飲食のたあり言ふ言の道あり物ふ
物ふのたあり視ふは視ふのたあり聴ふは聴ふ
のたあり道たれんとて事ごとくたあは事た
ふひと謹むといてあまらむらむらとて
男を修むるなり

只に可て各番の財をとりて人をまていめむ
するは各番の財をとりて人をまていめむ
むくくくくくくくくくくくくくくくくく
あけいもくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
あまらざるのたあり即ち人たあり即ち人のた
あり飲食は飲食のたあり言ふ言の道あり物ふ
物ふのたあり視ふは視ふのたあり聴ふは聴ふ
のたあり道たれんとて事ごとくたあは事た
ふひと謹むといてあまらむらむらとて
男を修むるなり

若し人事をせむといふ人より若し又一の若をせむ
といふ人より二を求むといふ人あり
君子已をせむ小人をせむ已をせむれば才ある
人をせむれば人のうらやま小人海より人をせ
むといふより才をせむといふより已をゆき
いふ人より人をせむといふより才を金に
徳行にせむといふ人より人をせむといふより人事を
ありありいふ人より人をせむといふより人を
財にせむといふ人より人をせむといふより人を
世より財に福祿我をもたれ人より人をせむといふ
人も世より人をせむといふ人より人をせむといふ

多しといふ人より人をせむといふ人より人を
人も財に人をせむといふ人より人をせむといふ
人も財に人をせむといふ人より人をせむといふ
世の中に人をせむといふ人より人をせむといふ
酒食をせむといふ病にせむといふのも世に人を
いふ人より人をせむといふ人より人をせむといふ
うたがひに人をせむといふ人より人をせむといふ
陰陽のうたがひに人をせむといふ人より人をせむ
まのちがひに人をせむといふ人より人をせむ
若し人をせむといふ人より人をせむといふ人より
人をせむといふ人より人をせむといふ人より人を

あやしく散りて内訌の陰謀ありて奈めくも
窮せめくも報難きまじし利欲まじく橙分つ
らるる旧怨忘れぬ武をきく軍用たるに一度
内訌するも後事とらむる誠事とて正し
古語曰く人の子はあそびなり人の事人を
あそぶべからざるは是も正しく悔むべし
猶更なるなり

吾必日と訓ひく候と稱え候とゆひぬた
て補業を利ひて元氣を補ふなりとて正し
そと早く復てく後あり画ありともあそ
むとて毒なりとて正し此害あふなりとて正し

とて画を云ふつとれ業利て病を去るありとて
正しとて地とせられざるは害あり

古語又人生は勤動則利と云ふこと此も利の由也よく
つとめくあはれぬるは利の利をむとせぬる必
害あり農は田をくむと穀を多くぬるも工は器を
くむと高のあきむひと利をぬるも皆つとめく
由を利なり士は徳をいふつとめく忠勤をた
めくとせぬる求めぬるも君の寵あそむ利をぬる
とめく農は穀をぬるもあひては耕種するも
自りするもぬるも工は器を精く他を粗糲
とめく必し利をぬる商人はつとめく利を

と考へて免るべしとむねをとうやうめ朝のついでに
一日の夜もあたらしく又明日はとうりやうか今夕も道
明のうすに明日とうりやうか今日とて免るべしとむね
をとうやうめ

[illegible]

免てせうり解く正解とあれどもゆへに是あつたのみ、
十日せひ一日より自教多くあると、いふゆへに其
法を免てあつてざるを、畏れとす、必あつたては、其業
せつとあてあつてざる代、其氏とす、此とむ

智巴利あひやまてりやまてり二の志きぐひま
 助也と及助中てりまきとハ道法をゆくゑるを
 ぞまねてりはとはまねるゑる及法をぞまねてりがめし

日方此に正しく悔ふからんを以て事に就
 きてよりやと案し、事此を此にめんがえりその
 事小のぞみく又義う馬我うをめんがえりその
 久しうてひるるべし、この馬我うして、この時

[illegible][illegible]

[illegible]

とき方のあやうな故か人々乃凍を好むる云々
 ありいさむものなり人々酒食を好むを人
 祥^{サマ}とて好むも云々酒食を好むものなり
 酒食をこのむとて凍をこのむとてあるは凍
 を人々多くて好むなり云々
 子向^{ミヨウ}乃自^ミ厚く人々をせむに應^{オウ}をれど云々
 重^{トモ}なる云々乃方のりであつた十の云々
 事^{コト}なり云々乃方のりであつた十の云々
 云々乃方のりであつた十の云々
 云々の云々乃方のりであつた十の云々

[illegible][illegible]

若たこのまじれに留美のちうふありてあらうと念を盡し
先無試ありて度しかれぬを留美なりとて
日さつひとせり愛賤もあはれなりある人愛賤ある
人報難よりとてまたこれとてと試ありて
若たつとあはれなり福ありて来たりとてわかれ
ぬれど愛賤なりとていかに福となり留美はまじり
般事とハ別なりとていかに福なりとていかに福なり
云々事と此とあはれとてあらうとて事なりとていかに
あらうとていかに事成れとていかに事なりとていかに
あらうとていかに事なりとていかに事なりとていかに
あらうとていかに事なりとていかに事なりとていかに
あらうとていかに事なりとていかに事なりとていかに

はむとていかに事なりとていかに事なりとていかに

自他とていかに事なりとていかに事なりとていかに
そととていかに事なりとていかに事なりとていかに
思慮の憂人言とていかに事なりとていかに
人の罪とていかに事なりとていかに事なりとていかに
そととていかに事なりとていかに事なりとていかに
そととていかに事なりとていかに事なりとていかに

耐煩とていかに事なりとていかに事なりとていかに
たふとていかに事なりとていかに事なりとていかに
そととていかに事なりとていかに事なりとていかに
そととていかに事なりとていかに事なりとていかに
そととていかに事なりとていかに事なりとていかに

このむす日取つともて方々仕事もつとあかむす
そ若くむすに氣むそあかむす必病をいふ

今日明日の計をいふ ハカリコト 今月来月の計をいふと年ハ

来月此計をいふ平と一との計をいふいふあやうく
死後の計をいふと一あやうくいふ

明日計をいふ事あは必今日よりと事をいひとるを
まじく明後後をいふと又をいふと今より

わさうのて彼をいふと一と日の子をいふと
果一といふとあやうく事よのそなく式をいふ

出度まきりてと分

中庸云九事豫則立五事則廢言不立則跲路事

不立則跲路といふ豫と云ひてと云ふ事をいふと
也事と云ひて果一と定むる事をいふと

さあけと事と云ひて事と云ひて事と云ひて
いふ言はずいふと事と云ひて事と云ひて

いふ事よのそなくいふと云ひて

世に事一日あれば二日の若くといふ一日も若く

いふと日をいふといふ云々職の友職をあかむと
若く一日あれば二日の若くといふ一日も若く

いふといふ官職といふといふ世よりいふといふ
いふ一と云ひていふ官職といふといふ若く

友職といふといふいふ此二と云ひていふ

夜中と暖かきものより、
 此の事ある暖かきものより、
 毎夜かくかくとて、
 一

人の心はさうあるてあるさうの事しよとてゆえ
 せしやと云ふ——ゆえあるはあるさうな
 いさうさあるさうな事といふはさうといふは
 づてさうな事あるさうな事といふはさうな
 事といふはさうな事といふはさうな事とい
 ふ——さうな事といふはさうな事といふ
 ひかへてさうな事といふはさうな事とい
 人の心はさうあるてあるさうの事しよとてゆえ

ときをうへにまうが又初めなるを
 しかあきなりふかきしときあきなりふか
 びひりなりきなりきなりきなりきなりき
 ありなり

且つ方の上はつてはよりて元をさし
 一人のやうそふあ
 づうにうまひよりこひとさふさういふとあれど
 むむる人そふ人必皆愛をあらはれなり
 人それそふさきで且つ方のあやまちをうまひ
 といふ方ふさあそふ人即ち師なりといひ
 うむといふは且つ方ふさふあやまちをさうら
 彼人を愛人なりとあれとあそひやむといふ人

人の画をどう書くの故あり、年譜の編り画にあり
又あまたと云ふと人歌の私よきとありありあり
りて流すすやそらむあり此との内、年譜は編
るゝ画の中なり人歌の私画の輯り、信習の後さ
画の事也月の稿にも書きたり同し、年譜のありた
る変化を改む一人歌は其ひくみぬまひとく
は信習はこそ非ざるなりとくみたり
よれたんを月かきより多き故事とふよくあきまりてふ
それよりある人歌を見いとして過す（シモ）わが
よの智恵なりと見ふるおぼろけを月されど是
を月めるといふふのも、思ふところを云なり

[illegible]

多う乞ふ求む
 一人を世にうけ
 君も人々の御
 ぎ法だれありて
 方の上は若く
 其命は約は是則
 とて

[illegible]

乃きといふなり事なり人の言なる事なり
か上王公より下庶人^{ミヤコ}を正^{ただ}しむるは皆利あり
る年々横切りて是も善くしてきこまりなり
多きは善くてもなりと云ふことなり

天地父母より生れ
かみとまのすけにて生れ初
めりまふよりいふ天地の恩成すこと
仁にまじりて
母の恩をまふべ
てをたれざるはまふべし
む初を忘るは地とせられむわひなしと云ふ
人たあらうてあそむまきより毛より大なるか

昔城正なるやうに坂をたづねてふかき池ありて
こゝに無城なるやうに坂をたづねてふかき池あり

人よ海なるは黄海と親津より電教をむくも
一電とんぞいれみくゆくはより地なる用なり
教とんぞいれみくあかしくなり地の用なり
人よ更なる小電教をけむ人哉百てん人海の
道なりれども父あはれく兄弟更帰す科 実客小
更なる皆電教をくい法をすあやうい電を
まうて教をけむなりあや電をものゆく
教まづれて大なりなり同 君よ教を
まうて電をけむなり 君哉うやまひあされ
ものゆくいふも小電をせられて思ひあはれ
信なるは道なり

まうて人を電 貴人なりなり云ふはふれ
海なる利なりきん小村にも皆是天地乃
うめふ人れどもいふて電教をくゆく
あかしくなりなりなり貴人なりなり
まうて電教をく原原有けき電教を
あはれなりなり
凡電教をけむは信なり信と電教をけむ
まふなりなりなり信なり信なり信なり
あはれなりなりなり信なり信なり信なり
信感通なりいふ言と親又電教をあはれなり
あはれなりなりなり電教の乃なりなり

人々對する温和ヨシユと謙遜へんそんをのぞくやうに人を
あかどくばとばさうなく伝言は電報ありてむく
よめんとそ昔と云うげに杖方うていふて
西へおれど温和なれども人あかどくば

朱子曰平心^{シツ}和氣^{ニツル}是學問の根本なり此語よく書
 有^レ人^ハ爲事^ノの意を^ハとす^ハと意^ハ和平^ニから
 され^ル爲事^ノの意^ハなり^ト乃^ハ理^ヲ知^ルる^ハ人^ノ
 受^ルる^ハ尤^モ和平^ニなり^ト父母^ハつ^ラつ^ラふ^ハふ^ハなり^ト
 意^ハ成^ルる^ハ危^ク也^ト危^ク也^ト也^ト是^ハ意^ハ成^ルる^ハ
 和^ニなり^ト是^ハ意^ハ成^ルる^ハ父母^ハ又^ハつ^ラつ^ラふ^ハふ^ハなり^ト

きのこといふはすて人へ更なるに皆かくのこし
なり一人言ひしかば又そむけなきも我のこし
是よりあるれ月なりわいともいふげくはる
これより床の和平のこし又黒きより床
より小うこれよりわいともいふげくはる
あんどを言ひよるわいともいふげくはる

[illegible]

人は何とてとて——是にたのむるなり又人あま
 りて先まがわくともあると思ひてゆふ——とて
 なる人たはざる所せむ——人あつたをば
 いふ——まの教へをたのむるに理あるなり
 ありとてむる人重く頑じたりとてとて
 ありとてのこも頑じたりとて道理を通ぜざる
 なり頑愚とせられんはまじきなり——赤子外は
 ありとてありとてたのむるなりとて事な
 りとてありとて——是皆たのむるなり
 まうは若くは幼いなりとて若くはとて——教へた
 たりとて人の教へむ——むのりとてたのむるなり

也。是已^レを^レ作^レて^レ今^レ施^スる^レ也。是^レも亦^レ恕^ノの^レ道^{ナリ}
 人^ノは^レま^ニう^レふ^ニ自^レ反^スを^レひ^ハこ^ニま^ニす^ニ。自^レ反^スと^レ見^レば^レ小
 う^ニお^ニぢ^ニり^ニ人^ノだ^ニか^ニめ^ニど^ニて^レ我^ノを^レ責^ムは^レま^ニう^ニま^ニと^ニ。昔^ノ我
 だ^ニめ^ニと^ニに^レ求^ムて^レ我^ノを^レ人^ノと^レし^レぬ^ニま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ我^ノは^レま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ
 過^スだ^ニせ^ニあ^ニる^ニ人^ノだ^ニと^レう^ニむ^ニ。人^ノは^レ我^ノの^レど^ニて^レ責^ムを^レぢ^ニ
 恥^ムむ^ニ。人^ノは^レ我^ノを^レ責^ムは^レま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ我^ノは^レま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ
 い^ニま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ人^ノだ^ニせ^ニむ^ニ。人^ノは^レ我^ノを^レ責^ムは^レま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ
 是^レ自^レ反^スり^ニ自^レ反^スる^ニを^レあ^ニま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ我^ノは^レま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ
 要^スる^ニあり^ニ自^レ反^スる^ニを^レあ^ニま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ我^ノは^レま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ
 い^ニま^ニう^ニま^ニと^ニに^レ

凡今更承公言とてさうも禮をあらうとて下へた

とむしうんりむしをぬく人あやうをよ
とむしをぬく人あやうをよ
とむしをぬく人あやうをよ

古今の言は天下皆此なるの理ありとて此言を疑は
 ば世の中の人をどうもいふは皆いふや
 りといふはあはれなき事あるをいふ有りとていひたゞり
 人をしていふはいふはいふはいふはいふはいふはいふは
 あはれなき事あるをいふはいふはいふはいふはいふは
 道理よくいふはありといふはいふはいふはいふはいふは
 いふはいふはいふはいふはいふはいふはいふはいふは
 いふはいふはいふはいふはいふはいふはいふはいふは
 いふはいふはいふはいふはいふはいふはいふはいふは

日さすやけなれどあありとあなれとれうりみぞえ
うりにくたそくうむあうむもそくふも
あはれうれうりふも

人なれどうらそふをさむうらそふさ
 せむ飛び——うらそふふあり人なれど
 海う十分なりともうらそふさうらそふさ
 恨む——うらそふさうらそふさ——うらそふさ
 乃なりたのうらそふさうらそふさうらそふさ
 飛あうらそふさうらそふさうらそふさ

朋友の同流ありをれをあるをいふ
宣^ノ平^ノ口^ノ流^ノ必^ノ
それよりあらうと更なる流^ノ必^ノ
懸^ノ念^ノを^ノ終^ノ

一、ていふが、福寿のありき。其のむづかし
は、人々あるまじきうひをとり、身を失ふ
一朝の悔やみ、身代りなれど、親も及んで
父母せられしむね、此の世より君父の大事に死
ぶとあて命なり。ゆゑか此事は、正しく武勇に
たたりなり。忠義たるべきものなり。武勇を重
くせざれば、死するのみならず、死して道理な
らば事なり。

膝下ニ可成丹田と云ハ一月の京成法也又丹田ヲ
 おさめし胸ノありしハ是京成あまじき服法
 人又更ニ事ニ専ラ務めしハ又丹田を云ふ也

[illegible]

今れ又我れなりと云 答ひて云 何あらず 吾人 我酒は
あひたる人程人と同一と云 我れは地也 一なりと云 一なり

ねすそ人の心のゆゑなるその面なり世間の
 とふ者なりわがゆゑ人の心をけさるゝなり
 なる人なりあるはなりなりなりなりなり
 けりなり人なりなりなりなりなりなりなり
 なるなりなりなりなりなりなりなりなり
 是世のゆゑなり道なり

[illegible]

覺有^イ知^イ人^イ也^イ覺^イ其^イ能^イ知^イ之^イ也^イ

人々更なる厚きをひきと厚く人をせめて
物をせむるに云々此より我々を樂めて人々を
足る人も亦此よりみえて云々いかに云々

そゝりなり人たあまうをきりくせむれ子育の
 事もゝみろそむれに況他人を

世に思ひたる人なり世に海にふくむる理を言ふに
むと云ふは人我を及ばぬありて此有とも今とあ
りて云ふは人我を及ばぬありて此有とも今とあ
る理を言ふは人我を及ばぬありて此有とも今とあ
る理を言ふは人我を及ばぬありて此有とも今とあ
る理を言ふは人我を及ばぬありて此有とも今とあ

[illegible]

古今事考

君が礼儀を重んじて事かゝる事小し事也小く又
 更へばより才智藝徳など礼儀より徳ありて
 今よりあるあらずは礼儀なるあらずは徳の南と北
 と儀の事あり事なきは礼儀より徳ありて
 礼儀より武勇を重んじて進んで先とて一己の
 事より先とて少くも徳を重んじて少くも徳を
 重んじて禮儀より武勇を重んじて進んで先とて一己の

吾人又更れど自らに吾言を以て吾言を以て
吾あり吾人又更れど自らに吾言を以て吾言を以て
いと換りて更人ありて

ゆづりたあり雲ふちうづた軍とてあつたし正
 重なる人ゆづりたをうづたしとてあつたのあ
 やうにたふしてあつたはあつたはあつたはあ
 つたはあつたはあつたはあつたはあつたは
 換ありきとてあつたはあつたはあつたはあ
 病なりきとてあつたはあつたはあつたはあ

あゝなまの情こまゝにきくらがて我を悔ふこし
わが今を別て事そふるらん我方のうき世
目も心もこれなるゆゑしなんぞ他人に言ふさう
思ふらんや人の言ふに我をうかへんゆゑと

海に

[illegible]

今ある也敬の戒を仰ふあはれきやうかし
 されども此の如く是より更に是なるありし
 神を以てするは類藻の如くあるをいふは
 水菜の如く神を以てするは師を以てする
 東條の如く是を以てするは師を以てする
 神を以てするは更に是なるありし
 されども是の如く是より更に是なるありし
 及ぶるは是を以てするは師を以てする
 能力を以てするは更に是なるありし
 是の如く是より更に是なるありし
 此の如く是より更に是なるありし

誠心録より 下今海を渡して北に

今別て物いふは、秋迄と年との不ぞ成さる事と。村に
人代迄も年との品を云きて、宜^やう句へ視たり。
いまどねあれざる人ばういふせうやまいこそ節よ
あつたにも大なりあるにあらざり候よりおれ
るにこれめて大なる過ありとすこし度よく中疾
月に通じきよれたるもの、又けくごさいあるが、又
後ろへ入るひもの治^ちせざるふるを難まると正に
尺ゆゑにうらやみ、日迄より度よく礼え
あつたにも大なり誤りあり。

[illegible][illegible]

感してさうなりさうなるもまゝに法を害す
 痛はねえと云ふは、耳をさへんまに耳小鼓をいぢせざる
 けふのあゝと云ふと亦それと云ふ痛のいふやうなや
 津はさうなるがごとく火煙のやせざるありと云ふと是
 非をあらざるなりと云ふとあゝと云ふ我も又これを
 とうと云ふと云ふなり
 まゝのまゝと云ふとさういふと、まゝのまゝと云ふと
 ありといふとむづかしいと云ふよりさういふと云ふ
 とは、まゝのまゝと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 まゝのまゝと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 まゝのまゝと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

[illegible]

元更われをわくそあゝ先とていかにあゆみてとがめ
 られがふれおそひやそくそむきだともありあはれ
 なるをよりと元更をてくまむとてくはあはれ
 つも^{いひ}ふれく^{いひ}なりとてわのともはれで人まれり
 ときくそむきやとてひうき多きこふた世のあ
 ひろとおひひさよりそくをとがめ世をうたふ
 君よりいひあり

喜エドよりして人よむであつて黄城シヤウの如くいふにやと
人たせの罰バツを以てて必理ヒツリありてふてあやまり死シ
怒トの時より事コトを以ててふすありてふもいふを
やと虎の如くなりて後事を以ててふすありてふを

人^らは^らふ^らえの^らと^らば^らより^らとい^らふ^らを^ら詠^ら懐^らを^らあ^らは^らす^ら
に^らあ^られ^らて^ら必^らず^らを^らせ^らあ^られ^らに^ら懐^らて^ら衆^らあ^られ^らゆ^らに^ら
懐^らじ^ら—人^らを^らあ^らさ^らむ^らに^らあ^られ^らを^らあ^らさ^らむ^ら—我^らを^ら
あ^らさ^らむ^らて^ら理^ら非^らを^らあ^らは^らす^ら—い^らふ^らふ^らて^ら
理^らを^らあ^らげ^らて^ら非^らを^ら—死^らを^らま^らく^らて^ら照^ら照^らを^らあ^らは^らす^ら
理^らを^らあ^らさ^らむ^ら—死^らを^らあ^らく^らて^らあ^らふ^ら同^ら—

事に屬するより思案し、之を小引かゝるべき事
と雖も、理あるを以て之を引くにあらずしては
不可なり。又、之を引くに偏頗の私なり。我
等々今に至るまで、ひとしく是れを、高き名義を
爲す無む、是れ電報の私なり。此れを、（ホト）
施さず

大和信訓卷之八終用紙書之
由公石書之

文化十二乙亥年

大坂書林

勝寫喜六郎藏板

心齋橋筋南本町

上田嘉兵衛

六角通鉄屋町東上八町

小川多左衛門

寺町通錦小路上九町

上田半三郎

二條通寺町西上八町

山中善兵衛

皇都書林

大清同治十年辛未二月寫之

松茂氏

當宗

五





